



Title	ビスマルクの社会観と社会主義
Author(s)	田中, 友次郎
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1975, 16, p.13-22
Issue Date	1975
URL	http://hdl.handle.net/10069/9644
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-26T19:33:23Z

ビスマルクの社会観と社会主義

田 中 友 次 郎

Bismarcks Gesellschaftsanschauung und Sozialismus

TOMOJIRŌ TANAKA

我々が社会主義 (Sozialismus) という概念を漠然と考える場合、前2世紀の古代ローマにおいて大地主の土地所有を制限しようとしたグラックス兄弟 (Tiberius Gracchus, Gaius G.) の改革努力や、大化改新 (645) 以来きわめて不徹底ながら実施された我が国公地公民の制度も、いわば土地についての一連の社会主義をめざしたものであるとも言えるかも知れない。ビスマルクが1880年代に企てた一連の社会政策すなわち、1881年の帝国官報における保護並びに救済方策の発表、1883年の疾病保険および疾病組合、1884年の傷害保険、1889年の疾病並びに養老保険も、同じ意味において一連の社会主義をめざしたものでないであろうか。思うに、19世紀後半の人々にも社会主義についての概念が余りにも漠然としていた。たとえば1867年2月12日プロイセン王国で始めて行なわれた普通選挙による衆議院議員の総選挙で、ハーゲン市 (ケルン市の東北約50キロ) の医師ラインケ (Reinke) は1859票を得たが、「彼は犠牲的な活動によって労働者の敬愛を集めており、自分のヒューマンな思想を社会主義的信念 (sozialistische Überzeugung) だと誤認していた。」^{注1)}現代に至っても依然として、社会主義の概念の認識がきわめて曖昧である。たとえば、1975年7月31日夜のNHKテレビ番組70年代われらの世界「西ドイツと日本」において、司会者鈴木健二アナウンサーは堂々とビスマルクを、近代における社会保障制度の創始者として、注釈なしで紹介していたが、背景を知らない一般世人に対して、この紹介はビスマルクなる人物について全く誤ったイメージを与えることは確かであり、ひいては一般世人に、ビスマルクが社会主義にある程度の理解を持っていたとの錯覚を生じかねない。この錯覚が生ずるとすれば、少なくともその主たる原因の一つは、一般世人が本稿の冒頭に示した「社会主義という概念を漠然と」してしか認識していないためだと考えられる。

そこで先ず、社会主義 (Sozialismus) ないしは共産主義 (Kommunismus) の概念規定を明確にする必要がある。この点については „Brochhaus Enzyklopädie“ (1966~1975. Bde.

21) に拠ることとする。この辞典は、ドイツ語で書かれたもののうち現代最大の百科辞典で、1,000人以上の学者・専門家および研究者が共同して、その編集に携さわっており、人類の現代知識を集大成したものを分りやすく与えてくれている。この辞典は *Sozialismus* の概念規定を次のように行なっている。——工業化および資本主義的経済様式の到来以後に生じた理念と運動であり、この理念と運動は、とくに自由主義的資本主義的刻印の、私有財産制度に基づく経済的社会的秩序の代りに、平等、正義および連帯を実現することとなる、共同所有権と共同経済的形態とに基づく新たな体制を、しかも社会改革によって (*Reformsocialismus*)、または革命によって (*revolutionärer Sozialismus*) 招来しようとするものである。なお、この辞典によると、*Kommunismus* は、ラテン語の *communis* (*gemeinsam*) に由来しており、その概念規定は次のように、a), b), c) の3つに分けられる。—— a)、一つの未来社会の表象。この社会では私有財産制度が廃止され、生産手段は共同所有に移され、消費は共同的な生活態度と一般的な財産共有とに基づいて規制され、すべての人間の経済的文化的欲求が平等に満足させられる。b)、そのような状態の創造をめざす経済的政治的学説。c)、この学説を実践に移そうと欲する政治的運動。なおまた、この辞典は次のように付言している。*Sozialismus* と *Kommunismus* との間には、なんらの拘束的な境界設定は存在しない。*Kommunismus* は *Sozialismus* と同じく、本質的には、18世紀に特に19世紀に生じた工業的な労働世界の産物である。しかしいくつかの共産主義的ユートピア的未来像の伝統が存在している。これらの未来像は、一方ではプラトンの „*Politeia*“ (注。共同体の一種の生活形態) に、他方では原始キリスト教に遡る。——筆者は以下、この概念規定を前提として考察する。

さてビスマルクは、彼の没年すなわち1898年に公刊された彼の回想録「思慮と追憶」のなかで、生来の彼の保守反動性を否定し、環境に影響されたみずからの青年時代の思想を自由主義的であったとして次のごとく述べている。「私の父は貴族的な偏見からまぬがれていた。そして父の内面的な平等感は、彼の青年期の将校としての感銘による場合を除けば、一般に決して家柄の過大評価によって変更されることはなかった。私の母は、当時の宮廷社会において自由主義的と見なされていた、フリードリッヒ大王、フリードリッヒ・ヴィルヘルム2世および3世の枢密顧問官にしてライプチヒ大学教授の門たるメンケン (*Mencken*, 注。 *Anastasius Ludwig*, 1752~1802. 大王の下では実は内閣秘書官にすぎなかった。) の娘であった。……シュタイン男爵 (*Freiherr von Stein*, 注。1757~1831, 1807~8農奴の廃止、職業選択の自由などプロイセン近代化の端をひらいた。) は、私の祖父メンケン^{注2)}を誠実なきわめて自由主義的な官吏であると評した。この環境の下では、私が親ゆずりとして受継いだ思想は、反動的というよりもむしろ自由主義的であった。……従って、『私の階級の偏見』が私にまといつけられており、貴族の特権の回想が私の内政の出発点となっていると主張する人があったら、その主張は若い世代の私の思想に対する不当な評価であると公言して差支えないのである。』しかし回想録なるものは、自然の情としてみずからを美化して表現し、都合のわるい、客観的にみて恥ずべき心情・行動と思われるものは省きがちである。回想録が史料として比較的価値の弱いこ

とがあるのも、一つの理由としてはこのためである。だから83才の老人のこの述懐を手放して認めるわけにはいかない。果たしてビスマルクは同じ回想録のなかで、彼の青年時代の、上述の述懐と矛盾する紛うかたなき保守反動性を次のごとく告白している。「私は大学（注。ゲッティンゲン大学）一年前期にハムバッハ（Hambach）の祝祭（注。1832年5月27日ハムバッハの城址——筆者も訪ねたことあり。30年戦争により完全に廃墟となっている。——で、余りにも時代おくれのドイツの政治社会の現状に憤激して、南ドイツにおける民主的共和的運動の2万人におよぶ熱情的な国民集会が開かれたが、6月28日ドイツ連邦議会——所在地フランクフルト・アム・マイン——の決議により弾圧された。）が行なわれ、二年前期にフランクフルト（・アム・マイン）の暴動（注。1833年4月3日夜9時半、当時成人同盟——Männerbund——とよばれた同盟の人々が警備本部所在地および砲手衛兵所の襲撃によって、連邦議회를解散させ臨時政府を樹立しようと企てた。この企ては市民および兵士の反対で失敗した。6月20日連邦議会によって設けられた中央調査委員会は、多数の【容疑者】主としてブルシェンシャフト——Burschenschaft、注。1815年始めてイエナ大学で組織されたドイツの大学生組合——の組合員を警察に引渡し、その多くを自由刑に処した。）が勃発した。この両事件が私に対し、プロイセンの学校教育に反発する騒擾的な国家秩序侵害に反感を起させた。」^{注3)}

このフランクフルト暴動から15年を経て勃発したドイツの三月革命に際し、ビスマルクがいかに反動的に行動したかは、拙稿「三月革命の勃発とビスマルク」（長崎大学教養部紀要人文科学第13巻）のなかで詳論しているが、彼が革命後間もなく1848年5月、革命鎮圧軍の司令官だったプリットヴィツ（Prittwitz）中将あて、自分の生地シェーンハウゼン（Schönhausen）^{注4)}村（ベルリンの西約100キロ）地方にいた友人らを誘って連署提出した次の手紙は、ビスマルクの反革命的保守反動的心情を遺憾なく吐露している。「その胸中にプロイセン人の心臓が鼓動している人々はすべて確かに我々署名者と同じく、新聞の論難を憤激の情をもって読みました。3月19日以来の最初の数週間国王の軍隊は、戦闘中その義務を忠実に遂行し、その受けた（注。ベルリン市からの）撤退命令に対して軍事的訓練と克己との卓絶せる実例を示したということに対する報いとして、この論難に曝されました。新聞がしばらく経った後これよりも妥当な態度をとった時、その理由はこの同じ優勢な党派において、その後生じたその正当な事態認識のなかに存しているというよりもむしろ、新しい事件の急速な動きが古い事件の印象を背景へ押しつけ、またこの党派の人々が勿体ぶって軍隊の最近の行動のために（注。プロイセン軍は、これより先4月23日、デンマルク王の併合計画に反対して支援を求めたシュレスヴィヒ公国を一時的に占領した。）以前のその行動を寛恕しようと欲しているということに存しています。そのうえ、ベルリンの事件についてのもろもろの情報をほとんど耐えられない憤激の情をもって受取った農民たちにおいては、あらゆる方面から、また大した反論なく、一部分は新聞によって、一部分は選挙の折に国民を説得している密偵によって流布されている曲解が、固定化し始めています。そのため農民たちのなかの気立てのよい人々がすでに、無理からぬことながら、ベルリンの市街戦は、国王がこれより先行なつた譲歩を奪い還すために、ひど

く誹謗されている王位継承者（注。王弟、後のヴイルヘルム1世）の承認および意志をもって、またはそれなくして軍隊によって計画された遣り方で惹き起されたものと信じています。」云々。^{注5)}

しかもビスマルクは、さらに回想録のなかで自分の地主貴族（Junker）的保守反動性を次のごとく弁明している。「国家の利益のみが私を指導した。それで、好意的なジャーナリストさえも私がつねに貴族支配を擁護していると言って非難する時、それは中傷である。家柄は決して、私にとって才腕の欠除に対する代償ではなかった。私が土地所有を擁護する時、私は同輩たる地主階級のためにそうしたのではなくて、農業の衰退のなかに我々の国家の存立に対する最大危険の一つを認めたからである。」しかし、このような通り一遍の弁明が、彼の保守反動性について現代人になんらの共鳴を誘わないことは、議論の余地ない処である。^{注6)}

思うに、ビスマルクの保守反動性の強烈さ、従って自由主義者ないし社会主義者たちに対する嫌悪の情は、すでに19世紀40年代における一、二の彼の言動を観ても明らかに察知できるのである。たとえば、三月革命の勃発に際しての彼の言動である。すなわち、ビスマルクは1848年3月18日および19日の事件（ベルリンではこの時のバリケード戦で約200人の市民が軍隊によって射殺された。）についての初めての驚くべき報せを彼の領地の在るシェーンハウゼン村の隣接地主ヴァルテンスレーベン（Wartensleben）伯の邸で、ベルリンから避難して来た婦人たちから聞いたが、この時「彼は初めの瞬間は事件の影響力に対して敏感であるというよりもむしろ、街路において『兵士たちが殺害されたこと』について憤激した。」しかもこの憤激に関連して、ビスマルク研究の大家エリヒ・アイク（Erich Eyck）は、その詳細な「ビスマルク史」のなかで次のような感銘ふかい叙述を行なっている。「我々が一カ年半の後書かれた、三月革命犠牲者たちの墓地フリードリッヒハイン（Friedrichhein）訪問についてのビスマルクの手紙『私は死者たちを決して許すことはできない。……かれらが私の祖国から作り出したものを観る時、私の心臓は毒薬でふくれ上り、これらの破壊者たちは……』を読むならば、我々は彼の憤激について一つの映像を思い浮かべることができる。」さらにまた例えば、1849年初め（三月革命に対する反動はすでに1848年なごころから始まっていた。）ベルリンにおける戒厳状態の撤去に関する議論に当って、ビスマルクは社会主義者たちとの対話中、その一人デステ（d' Ester）に向って、「私が命令権を持っているとしたら、諸君を直ちに銃殺の刑に処するであろう。」と言った。これに対するデステの答えは、またまさに両者の相容れない様子を如実に表現したものに外ならず、両者の相敵視する本来的な姿のなかには、実に犬猿もただならぬを思わせるものがあった。すなわちこの時デステは、「我々にしていつか政権をにぎるに至ったならば、あなたを絞殺の刑に処するであります。」と応酬したのである。この点に関連して筆者は、これより半世紀近くを経た1895年すなわち帝国宰相ビスマルク退官後5年、ドレスデンで出版された「ビスマルクと社会民主党」と題する明らかにビスマルクに心酔している著者（氏名不詳）の仮とじ本（東大経済学部蔵書）の一節を印象ふかく想起するのである。いわく、「社会民主党の選挙人大衆の意向は原則的に、ギロチンによる解決に向けられていることには、疑問の余地がない。従って最終的結果において今日のドイツ王朝と社会民主党選挙

人の増大しつつある意識的な革命的意志との間で、ただ唯一の二者択一が存している。すなわち、首を刎ねるか刎ねられるかのいづれかである。ビスマルクの深く洞察しているまなこは、相闘っている力のこの最後の政治的対抗をすでに数年来明らかに認識しており、……。社会民主党は、同党に対するビスマルクの見解は的確であるということを全く十分に知っており、それゆえ同党が今日でもなおこの80才の侯爵ほど憎んでいるドイツ人はいない。」

要するにビスマルクの保守反動性は、老年においては言うに及ばず、すでに青年時代から牢固として抜きがたいものであったが、一般に彼の社会観なるものはいかなるものであったか。社会主義に対する彼の見解はどのように理解さるべきものであるか。試みに著名な一、二のビスマルク研究家の見解に注目すると、マックス・レンツ (Max Lenz)、エリヒ・マルクス (Erich Marcks) のごときは、前記の氏名不詳の著者ほどにはビスマルク一辺倒ではないが、「つねにかの栄誉あるプロイセン王国、プロイセン国家、ドイツ帝国にとっての意義をその政策の決定的問題としているビスマルク」なる表現によって、この宰相の保守反動性にいわば好意的な仮面をかぶせており、ロマン・メーニヒ (Roman Mönig) に至っては、ヒットラーが政権をにぎった1933年「トライチュケとビスマルクとの社会政策体系」と題する学位論文のなかで、ビスマルクに対し一層好意的に次のごとく明言している。「ビスマルクは、社会民主党の革命的マルクスの核心における国家を危うくする傾向から生ずる困難な問題に対しては、彼の歴史的課題を国家社会主義 (Staatssozialismus, 注。「資本主義の弊害を国家権力の干渉によって調整しようとするもの」と解する。) 的思想のなかで理解した。そこで彼はこの破壊的勢力を弱めねばならないこととなり、普通選挙実施にもかかわらずプロレタリアートの階級闘争を根絶しようとしたのである。ここからしてマルクス主義およびその政党と、革命的根拠思想にまさに背離し国家および社会の問題を国民的見地から把握しようとする国家社会主義との絶縁が明らかに生じて来たのである。」

ビスマルク自身に至っては、これら研究者の彼に対する弁護をはるかに超越した古色蒼然たる中世的封建的思想に捉われていた。すなわち、彼は社会主義者たちの求めるような意味における社会問題の解決を、今日の国家では不可能であり、それは神の摂理に対してのみならず人性に対しても背馳するものであると考えた。ビスマルクは次のように言っている。「資本家労働者間の矛盾は世界と同様古いものである。それは自然法に基づくものであり、決して変改され得ないものである。この矛盾を排除しようとすることは、まさに円の求積法 (Quadratur) を解決しようとするのと同様なものである。造物主は人間を種々様々に創り出し、全く異なる能力を賦与している。個々人、諸種族およびかれらの業績の多様性こそは、成果および進歩のための不断の闘争における人類発展の最も力強い前提である。この多様性が除かれるとすれば、あらゆる人間的努力と闘争とは終末を告げるに至るであろう。また労働者たちが全く満足しているということは不可能である。かれらは自分自身より幸福な人々を見る限り不満足であり、この不満が現われるれば現われるほどこのような人々に対しこの不満の正当性を表示するに至るのである。国家の側から8時間労働、1時間1マルク制が指令されるとしたら、——その

結果はどうなる。欲望が増大し、やがて人々はもはや8マルクでも済まされなくなるであろう。こうして賃銀は労働者の要求の増大とともに騰貴し、遂にはあらゆる事情は破壊され、十分な賃銀を払い得る資本家はもはやなくなるに至るのである。それゆえ労働者の賃銀値上げの要求に対しては、たとえそれを拒絶しない時にも慎重な態度をとり、事実正当な事柄のみを承諾し、単に労働者の貪欲と指導者の権力欲とを高めるのみに役立つ強要された不当な譲歩というものに対しては、これを拒絶することが必要欠くべからざる事柄である。私は労働者の境遇は文化の向上と共にひとりでの改善されるということも一つの自然法則とみなしているゆえ、なおさら前述の見解のなかに、労働者に対する冷酷さを認めることは出来ない。労働階級の生活改善は、飛躍的にではないが近代的発展の結果として徐々に遂行されるものである。」^{注13}

筆者はこのようなビスマルクの社会観ことに労働問題に対するこのような見解のなかに、彼のとりわけ、既述のごとき1880年代における社会政策実施計画の根本的立脚地が、別にビスマルクの人道的誠実さと信念とによって確定されたものではないことを洞察すると共に、彼のユンカー的な、徹底的現状維持的保守主義思想と、社会科学的原理すなわち、近代資本主義の発展およびこれに伴う矛盾の増大、従って生ずる社会・労働運動の必然的激化に対する彼の驚くべき無知無理解とを明らかに看取できるのである。一步譲って仮りにこの批判が言いすぎであるとしても、「ビスマルク自身の経済学的知識は、資本主義的利潤追求をやっと理解し始めた（プロイセン首相就任）当時のユンカーの地位にふさわしく、封建的・中世的ガラクタと俗流経済学の初歩をごったまぜにしたものに過ぎなかった。」^{注14} 思うに、このような極端な現状維持的保守反動性が、彼をして1878年10月19日以来1890年9月末に至る12カ年の長きにわたってドイツ帝国全土に荒れ狂った、言論・集会・結社を拘束する社会主義者法（Sozialistengesetz、正式の名称は「社会民主党の公安を危うくする運動に対する法律」—— Gesetz gegen die gemeingefährlichen Bestrebungen der Sozialdemokratie）なる狂気じみた弾圧法（周知のごとく、文化闘争—— Kulturkampf と並んでビスマルク内政上の二大失策）の成立に駆り立て、また社会民主党の説く処のいわゆる未来国家（Zukunftsstaat）をもって夢想にすぎずと嘲罵させるに至ったのである。ビスマルクは次のように痛論している。「各人に自分のものが割当てられるとしたら、人々は何ら自己の独立の職業をも独立性をも持たないで各人が監督者の強制下に在る監獄のような生活に陥るであろう。しかも今日監獄にさえ少なくとも統制を司る監督者が居り、それは人々が愁訴することのできる尊敬すべき人物である。しかしすべてが社会主義者から成る監獄のなかで誰が監督者となるであろうか。それは雄弁によって大多数の投票を得る演説者であり、それに対してはなんらの反対の訴えをも跡を絶つに至るであろう。これこそ古来見出される最も無慈悲な専制君主とその走狗とを生ずるに至るものである。私は我々がこのように、言わば裂目を通して関知しようと力めている（注。よく窺い知ることのできないとの意。）この理想を想像する時、このような関係のなかでは、決して生活できないであろうと信じている。」^{注15} こうしてビスマルクは「社会民主主義的狂気（sozialdemokratische Verrücktheit）に対する社会の人々の共鳴は、かれらの理解力なるものが全く愚味なもの

であり、未発達であるために、自己の貪欲に駆られた老猾で野心のある指導者の美辞麗句に絶えず乗せられているという事実に基くものである。」^{注16}と公言して憚らなかった。

要するに以上のようなビスマルクの社会観ことに社会・労働問題に対する彼の見解は、ビスマルクの地位権勢を考え合わせる時、社会主義者たちの懐く思想に対して、単なる主義学説の相違としてではなく、実践的分野において激烈な矛盾抗争を惹き起こすべきことは、元来火を見るより明らかであった。すなわち、ビスマルクの社会・労働問題に対する見解のなかには、社会主義者たちの拠って立っている主義主張といささかも相容れるところはなかったのである。従ってビスマルクのいわゆる国家社会主義 (Staatssozialismus) なるものは、社会民主主義的社会主義 (sozialdemokratischer Sozialismus) とは、いわば似ても似つかないものであった。にも拘わらずビスマルク自身おのれの政策を社会主義的 (sozialistisch) であると宣言したことに対しては、その政治的意図が奈辺にあったかはとにかくとして、20世紀70年代の社会科学的思想に慣れ親しんでいる我々にとっては、大きな興味いやむしろ啞然たる驚愕を禁ずることができないのである。すなわち彼は、社会主義者法による弾圧が法的威力を発揮するどころか、むしろ社会民主党の勢力を益々増大させている1882年6月、ブルジョワ民主主義を唱える自由貿易主義的な国民自由党の衆議院議員バムベルガー (Bamberger, Ludwig) による彼の国家社会主義政策に対する非難に対し、次のように答弁している。「農民階級の解放は社会主義的なものであった。鉄道建設のためのあらゆる収用は社会主義的である。土地の売買、拡張、全救貧事業、就学義務は、極端に社会主義的である。これらはすべて社会主義的なものである。あなたが Sozialismus なる言葉が誰かに恐怖を感じさせることができると思ふ時、あなたは私が多年克服している且その克服が全帝国立法に徹頭徹尾必須的な見地に立っていられるのである。」^{注17}

しかしながら「かのウォーターローの戦いの年に生まれ、熱情的な祖国愛とプロイセンおよびその英雄に対する誇りをば自己の相続財産として全力をあげてその若い精神のなかに沈潜させ、学生時代 (注。ゲッティンゲンおよびベルリン両大学) すでに『熱狂的ユンカー』 (toller Junker) として人々の注目を惹いていた」彼ビスマルクにおいては、彼の答弁をどのように解釈するにせよ、要するに彼がいかなる意味で自己の思想または政策を「社会主義的」と呼称しようとも、既述の社会主義の概念規定に照らして、「社会的難問に対し、未だ曾て真の社会主義的立場から、これを解決しようとして企てたことはなかった。」^{注18}のである。従って、元来穏健な自由主義的史家クラインハッティンゲンのごときも、曾ては、全ドイツ労働者協会の指導者たる社会主義者ラサール (Lassalle, Ferdinand. 1825~64) を政治的に利用しようとして企てて度々歎談したビスマルクが、1870年代以後社会主義的勢力の増大に恐怖豹変して弾圧政策をとり、とくに1878年5月11日および6月2日の皇帝暗殺未遂事件を、理不尽にも事実上責任なき社会民主党の責任に帰して議会をあやつり、社会主義者法を制定したことに対し、次のごとく彼を痛罵している。「ビスマルクが社会民主党をば国家に危険なものに見なしたがゆえに、これを迫害したということは、同党に対するビスマルクの態度をば一つの矛盾にみちた馬鹿げ

たものとなした。」^{注20}それゆえまたフリードリッヒ・エンゲルス (Friedrich Engels, 1820～1895) も、既述のごときビスマルクの自称「社会主義的」に対して冷笑的な辞句をもって次のように攻撃の鋒を向けている。「ビスマルクがなんらの経済的必然性なしに、ただ戦争の場合によりよく利用するために、鉄道従業員を政府党の投票家畜 (Regierungsstimmvieh) に育て上げるために、別して議会の決議に拘束されない一つの新たな財源を作り出すために、プロイセンの主要鉄道線を国有にしたところで、——それは直接的にも間接的にも、意識的にも無意識的にも、断じて社会主義的施設ではない。そうでなかったら、王室海事会社や王室陶器製造所や陸軍の裁縫隊までが、社会主義的な制度だということになる。さらに甚だしきは、フリードリッヒ 3 世 (1888, 在位 3 か月余り) 治下で、ある狡猾な男によって大真面目に提案された遊廓の国営のごときものさえそうである。」^{注21}同じくマルクス主義の歴史家フランツ・メーリング (Franz Mehring, 1846～1919) に至っては、さらに露骨きわまる言辞をもってビスマルクの自称「社会主義的」の裏面、いなむしろ本質を次のように指摘論難している。「かりそめにもビスマルクの社会主義なるものが云々されるならば、それは慈善社会主義あるいは従僕社会主義 (Almosen-oder Lakaiensozialismus) と名付けられねばならない。言うまでもなく明らかかなことだが、ビスマルクが鉄の挺子でも動かね頑固さをもってプロレタリアートの革命的闘争に対抗したばかりか、ブルジョワ社会の地盤の上で労働者階級の地位を向上させるのに役立っているいつさいの社会改良に対抗したことは、十分人の知る処である。前世紀でも資本主義的搾取者の誰一人としてビスマルクほど公然と労働者の安息日を危険な贈物と宣言し、工場における少年労働の立法的規制を家庭内の神聖をおかす忌まわしい干渉であると非難した者はいなかった。ビスマルクのいわゆる社会主義なるものは、彼が曾て側近の一人に労働問題をうまく片づけるための主導的動機 (Leitmotiv) として述べた次の言葉に尽きるものであった。すなわち、『老年や痲疾になった時、恩給をもらえるという期待を持つ者は、たとえそれが非常にわずかなものであっても、不安な未来を夢みている者よりは、自分の運命をより幸福でより満足なものに感じ、はるかに従順で扱いやすい。たとえば諸君が私人の召使いと官庁あるいは宮廷の従僕とのちがいを見たまえ。後者は、前者よりもはるかにかれらの職務に愛着を持っているから、よく言うことをきくだろう。それというのも、かれらは年金を期待できるからだ。』ビスマルクの社会主義——というのはむろん言葉の濫用だが——は、つねに慈善で労働者の目を眩ませ、労働者を、宮廷の従僕のように扱いやすい、よく言うことをきく存在にしようためのものであった。」^{注22}

要するに我々が、これまで縷々述べ来たビスマルクの社会観ことに労働問題に対する彼の見解ないし立場を考え、さらに、「借金に苦しむユンカーの家業を継ぎながら、その貪欲と商才とにより晩年にはドイツ第一級の大地主にのしあがり。」^{注23}その外交的大天才をもって史上比類なき権勢地位をほしいままにしたビスマルクの心境に思いを致すとき、彼の眼に映った社会主義運動は階級的運動でもなく、大衆的運動でもなく、プロイセン王国およびドイツ帝国に対して忠順なるべき労働者が、その無知ゆえに指導者の扇動にあやつられている反国家的反社

会的な過激派的運動にすぎなかったとすることができる。しかし我々が静かに客観的なまなこをもって考察するときは、とくに1878年10月以来社会主義者法による峻烈な弾圧下に在ったドイツ帝国におけるビスマルクの社会政策は、いわゆる「鞭と飴」(Peitsche und Zuckerbrot)の体制下のそれにすぎないのであり、同じ時期に、授爵を固辞し、多年イギリス人地主に搾取され貧苦にやつれたアイルランド人農民の解放のために身命をなげうつていた自由主義的な人道主義の平民宰相「グラッドストーン (Gladstone, William Ewart. 1809~1898)を政敵としていた彼ビスマルク」侯爵にとって、「労働者を始めとする貧民たちの救済を改善することは、目的そのものではなくて、むしろ単にかれらを政治的に獲得するための手段にすぎなかった。」と結論できるであろう。

注

1. Mehring, Franz : Geschichte der deutschen Sozialdemokratie. Bd. II. S. 256.
2. Bismarck, Otto von : Gedanken und Erinnerungen. Bd. I. S. 17.
3. ibid. S. 3.
4. 「プリットヴィツ將軍は、その全兵力1万4,000人と36門の大砲とを使用して、市街戦を指揮し、パリケードを取り払った。翌朝(注. 1848年3月19日朝)將軍は(ベルリンの)諸要地を制圧した。」
(Matter, Paul : Bismarck et son temps. Tome I. P. 107.)
5. Bismarck, Otto von, : Gedanken und Erinnerungen. Bd. I. S. 30 f.
6. ibid, S. 18.
7. Hagen, Maximilian : Bismarck. S. 68.
8. Eyck, Erich : Bismarck. Bd. I. S. 85 f.
9. Bismarck, Otto von Die gesammelten Werke. Bd. 8. S. 90.
10. Bismarck, und Sozialdemokratie (Dresden. Druck und Verlag der Druckerei Glöss). S. 4 f.
11. Max Lenz und Erich Marcks : Das Bismarck =Jahr. S. 216.
12. Mönig, Roman : Heinrich von Treitschkes und Bismarcks System der Sozialpolitik. S. 144.
13. Hofmann, Hermann : Fürst Bismarck. Bd. I. S. 135 f.
14. Mehring, Franz : Geschichte der deutschen Sozialdemokratie. Bd. II. S. 116.
15. Bismarck, Otto von Die gesammelten Werke. Bd. 11. S. 607.
16. Bismarck, Otto von : Gedanken und Erinnerungen. Bd. II. S. 79.
17. Egelhaaf, Gottlob : Bismarck. sein Leben und sein Werk. S. 349.
18. Schmoller, Gustav von : Charakterbilder, S. 29.
19. Max Lenz und Erich Marcks : Das Bismarck =Jahr. S. 216.
20. Klein-Hattungen, Oskar : Bismarck und seine Welt. S. 383.
21. Engels, Friedrich : Die Entwicklung des Sozialismus. S. 46.
22. Mehring, Franz : Geschichte der deutschen Sozialdemokratie. Bd. II. S. 115.
23. conf. 拙稿「メーリングのビスマルク観」(長崎大学教養部紀要人文科学第14巻)
24. Mehring, Franz : Geschichte der deutschen Sozialdemokratie. Bd. II. S. 583.

25. Fritz Ehringhaus und Wolfgang Hermann : Geschichte der neuesten Zeit, 1871~1928. S. 8.
26. conf. Mehring, Franz : Geschichte der deutschen Sozialdemokratie. Bd. II. S. 586.

(昭和50年9月1日受理)